

—目 次—

- 1 拒否と出奔 002
- 2 逃亡先にて 017
- 3 待望の再会 028
- 4 記憶は戻るも？ 056
- 5 本懐を遂げたあと 067
- 6 エピローグ 077

公爵邸別棟 書齋 午後四時

「またか……」

カーティスは本邸から送られてきた手紙を憎々しげに見つめた。
差出人は甥のヒューゴ。

十年前、自分と跡目争いを競った子どもで、今年十七歳になる。

病弱だった兄は跡継ぎを定めぬまま、急死した。

おかげで公爵家は上へ下への大騒ぎだった。

分家連中は、年端としはも行かぬ甥つ子を椅子に据えて我先に傀儡かいらいをたくらんだかと思

えば、正義感の強い連中はカーティスを担いだ。

兄が亡くなれば次は弟が跡を継ぐのが正当だ、というわけだ。

カーティスを推す者は皆、武闘派でそれも事をややこしくした。分家の私兵を勝手に動かし、甥っ子とその母を殺そうとしたのだ。

血で始まれば血で終わるのが道理。

事態をおんびん穩便に済ませられねば、ほかの貴族からも次期公爵は部下を操れぬ未熟者とそしられる。

結果、カーティスは現役を退いていた大伯父を頼ることにした。

頼らねば、当時十八の小僧では事態を收拾することはできなかった。

(結局、私が公爵を継ぐ資格はないと大伯父どのに白状したも同然だったな……)
口に苦いものがせりあがってくる。

公爵家の跡目争いは大伯父の登場により終結し、今では自分に公爵家を継ぐ資格はない。

名実ともに甥のヒューゴが公爵家当主だ。

「この屋敷から出たいが、そう簡単にはいかない……か」
継承権を放棄しても公爵邸で暮らしていると、分家の連中はまだ諦めがつかないらしい。

いまだに決起の言葉を口にしてくる。

（わざわざ本邸から離れた別棟で暮らしている意味が分からんのか。馬鹿め）
公爵になりたかった欲望がない訳ではない。

だがカーティスが一番やりたかったのは、兄の補佐だ。
病弱な兄を守り、公爵領を今よりも豊かな土地にする。

領都を大きくし、字が読める子どもを増やし、新たな産業を興して、また豊かに。

だがそれはもはや叶わぬ夢だ。

兄は死に、跡目争いが起きたことで義姉は自分を信用しておらず、甥のヒューゴは何を考えているかも分からない。

争いが終わってから、幾度となくヒューゴに私を放逐ほうちくしろという手紙を出しているのに、きまってるの答えは「ノー」だ。

今手元にある手紙も同じ内容だった。

(こうなったら自力でなんとかするしかない、か……)

書斎に入ってくる日の光がかげった。

冬が近いのか、日の名残は驚くほど減っている。

目をつむれば、兄夫婦が仲むつまじく暮らしていた頃の光景がよみがえった。

本邸の広大な庭園で甥のヒューゴが兄譲りの栗毛を揺らして、その小さな体ごと私の胸に飛び込んでくる。

それが当時の日常だった。

『おじたん、おじたんね。ひゅーこのティアアラあげる!』

前歯の抜けた生え替わり中の顔でにっかりと笑う姿は、まるで小さな太陽だった。

白詰草の花冠をかぶせられ、左手の薬指には指輪まではめられて。

あの時、ヒューゴは私に何と言っていただろうか。

あの舌つたらずな口調で『おじさんと結婚する！』と宣言していた気がする。

男同士では無理だと言っても聞かず、なかば強制的に愛を誓わされた。

『ほんもののキスするの！』

そう言つて、甥っこに初めての唇を奪われたのはご愛敬だ。

唇中をなめ回され、犬みたいだぞとたしなめたら、犬でいいもん！ と反論された。

あの日は兄の病状が驚くほど軽くて庭園にも出られたのだ。

甥っこはいつもベッドに伏せる父が庭園に出てきてくれて、大興奮していた。

そんな些末で、なんてことない日常が今となっては果てしなく遠い。

郷愁に胸を引き裂かれながらもカーティスは、甥からの手紙を破り捨てた。

(今夜、この屋敷を出る)

決意を新たに、拳をかたく握りしめた。



「叔父上がいないだって?」

早朝、いつものように別棟で暮らす叔父上を訪ねたら、信じがたい答えがかえってきた。

曰く、叔父上が出奔した、と――。

嘘だ。嘘だ。嘘だ!

あの超がつくほどまじめで、作法にもうるさかった叔父上が自分に断りもなく出て行くはずがない!

ヒューゴは玄関で押しとどめる従僕を押しつけて、カーティスの寢室に向かった。
「叔父上！」
寢室の扉をあけはなつ。

こんな乱暴にあけたらきつと叔父上は無礼な！ と自分を叱り飛ばしてくれるに
違いない。

そう思っていたのに――。

ドアを開けた先の寢室には誰もいなかった。

閉じたカーテンの隙間から朝日がわずかに差し込んでいる。

ベッドのシーツは乱れひとつなく、枕に頭を寝かせた跡すらない。

寢室のクローゼットはきちんと閉じられていて、一瞬、朝の執務で一足先に出か
けてしまったような気さえした。

（いいや。メイドが別棟に入るのは早くとも朝六時。もしも叔父上が朝の執務で出
たなら、とつくにカーテンは開けられているはず……！）

だが寢室のカーテンは閉じたままだ。

「ご当主様！」

背後で従僕たちがなにかわめいているが、そんなのはどうでも良かった。寢室の扉を閉めて、カギをかける。

毛足の長い絨毯じゅうたんを踏みしめて、叔父上が使っていたベッドに近づく。

シーツに手を乗せたが、温かみはどこにも感じられなかった。

「どうして……」

尋ねても答えてくれる人間はいなかった。

幼い頃から病がちの父上に代わり、なんにでも応えてくれた人は突然いなくなっ
てしまった。

「うっ……ふぐっ……」

目が熱くなつて、涙がいくつもいくつも浮かんできて、視界が滲んだ。

喉から嗚咽が上がり、抱きついた枕に吸いこまれていった。

清潔に洗われた枕からは、叔父上の匂いはしない。

ベッドには残り香ひとつなかった。

（僕が……いいや、俺がどれだけ好きだったか知ってるくせに！ あの性悪叔父上！）

執務の時にだけかけていた片眼鏡がどれだけ色っぽかったことか。

キュツと締まった細い腰にベストを着込んだスーツ姿は、いつだってヒューゴの目を奪った。

正直、子どもの頃本気で結婚を申し込んだら、苦笑いで男同士は結婚できないんだぞ、とさとされたことは嫌でもはつきり覚えている。

あの日からずっと考えていたのだ。

叔父上と結婚するために何をすればいいか。

この国で同性同士の結婚を秘密裏に行っている貴族は数多い。

ただしその多くは中流の貴族たちであって公爵、果ては王族などは子を残すことが厳しく課せられている。

だからヒューゴも婚約者を娶り、血を残さねばならない。

(使えるものはなんでも使つてやる……!)

そう思い、自分と同じく同性を好み、かつ口が硬く、生涯秘密を守りあえる女を探していた。

要は偽装結婚の相手だ。

その相手がようやく見つかった矢先にコレだ。

(絶対に逃がすものか!)

公爵家当主としてのプライドも恥もかなぐり捨てて、ヒューゴは叔父の寢室を漁った。

彼が行きそうな場所にまず当たりをつける。

それが先決だった。

「これじゃない。これも違う。日記はつけてないのか？」

あのまじめな叔父上のことだ。

必ずなにか書き留めているはずだ。

クローゼットの棚を漁っていると、カタン、と引っかかる場所があった。

何かが裏側にくっついて、それが引き出しの滑りを悪くしている。

(何だ……?)

そっと棚の裏側を見ると黒革の小さな手帳が挟まっていた。

ひっそりと、まるで人の目から隠すように。

「見つけた……！」

ゆっくりと丁寧に取り出してページをめくる。

流麗な筆致きちようめんに几帳面な文字の並び。

叔父上の書いた文字だ！

もう手紙の決まり文句でしか彼の文字を見ることができなかったから、毎日の取りとめもないことが書かれた文字の羅列はそれだけでヒューゴへのご褒美みたいなものだった。

手帳は数年前のもので叔父が屋敷をあけて旅行した時のことがこまごまと書いてあった。

一見、目を引くような情報はないように見えたが、最後の数ページだけ違った。繊細なタツチで風景スケッチが描かれていたからだ。

広々とした平原でのんびりと草を食む牛たち。小さな手帳のなかで彼らは生き生きとしていた。

そのスケッチには自分もこんな風になりたいという叔父の思いが込められているように見えた。

「ここか」

場所は王国最南端にある辺境の地カナン。

のどかで気候も穏やかな土地で、お前の父が療養するならあんな土地がいい、と叔父上が呟いていた記憶がある。

静かな場所が好きと良く語っていたから可能性は高い。

ヒューゴは手帳を持ったまま、ポケットから通信用の魔道具を取り出した。

銀細工に赤の魔石をはめこんだイヤークラフで、一見するとアクセサリーにしか見えない。

そこが気に入っていた。

魔石を指で二回つつくと、相手と通信が繋がった。

「例の件、ひと月予定を早めるぞ」

間髪いれずに命じれば相手は少しとまどった声を出した。

「——公爵夫人が領くとは思えませんか……?」

「今さらあの母が公爵家の全権力を握れると思うか?」

それは問いかけではなく確認だった。

父を手厚く看病すると言っては毒薬をまぜて飲ませていた女だ。

それをヒューゴが知ったのは、父が亡くなってずいぶんあとだ。遺体の検分をした医師が行方をくらませていることに疑問を感じ、調べさせたところ遺体に毒を盛られた反応があった事を知った。

父が亡くなってから母は毎日こう訴えかけてきた。

——これでああなたは公爵家の当主になれるのよ。

その言葉には言外に『私がしてあげた』という意味が含まれていた。

あの母がどうなろうと知ったことか。

今となつては本当に自分が父の子どもであったことすら疑わしい。似ているのは髪の色。それだけだ。

両親ともにクセっ毛とは縁遠い髪質で、くるんくるんと跳ねまわる自分の栗毛に怖気を感じ始めたのは物心ついた頃からだった。

だからこそ、そんなことなど気にせず自分を甥っ子として可愛がってくれる叔父が好きだった。

(この屋敷も権威も、すべて叔父上にお返しする……！)

必ず叔父上を取り戻して帰ってくる。

そのためには手段を選んでいる余裕はなかった。

「僕はカナンに向かう」

《……………かしこまりました》

通信を切ると、寝室に静寂が戻った。

いま叔父上はどのあたりにいるだろう。

何を見て、聞いているのだろう。

早く会って聞きたかった。

辺境の地　カナン　午後一時　雨

叔父上の足取りは思ったより簡単にたどれた。

といつても多くはヒューゴ子飼いの『狗』たちがうまく働いてくれたお陰だった。跡目争いが起きたあと、誰も信用できなくなった。

争いを終結させてくれた大伯父はすぐに自領に引き籠もってしまい、あとはお前たちで蹴りをつけると言わんばかりの行動だった。

それもあって、ヒューゴは公爵家やその分家に関わる者たちとは線を引き、自分の私兵をつくりあげた。

その多くは有能な冒険者上がりの男たちで、諜報活動に長けたものたちだった。結果、母の不貞の証拠も見つかり傷ついたが、叔父があゝの争いの早期解決に向け

て大伯父に取り次いでくれていたことも分かった。

母が言っていたような反乱の意思は叔父にはなく、逆にそれを焚きつけていた母にあったのだから、世の中とはふしぎなものだ。

叔父が出て行って半年後、彼がカナンの土地に到着するという報告を受けて、公爵としての仕事を切り上げて、転移の魔道具を使ってカナンに先回りした。

(これでは叔父上を待っただけだ)

カナンの村に一つしかない食堂で苦いコーヒーをすすりながら、叔父上の到着を待つ。

窓からは身を切るような冷たい長雨ながあめが降りしきっていた。嵐が近い証拠だ。

もちろん貴族の身なりのままなんかで来ない。

得意の幻影魔術を使って、ハーFRING族に見えるように細工した。

なんでもハーFRINGとは成人しても人間の少年にしか見えない種族で、その寿

命は人間の二倍だと言われている。

好奇心旺盛な種族でその多くは冒険者として生計を立てている。

（カナンには上質な薬草の群生地があるから、冒険者もよく立ち寄っている。この
恰好なら怪しまれることもない。僕って完璧！）

内心ガッツポーズを取りながら、平静をよそおう。

だいじょうぶ。

相手からはハーフリングの少年にしか見えない。

しかし来るのが遅い。

予定では遅くとも昼過ぎには乗り合い馬車がやってくる予定だ。そこに叔父上も
乗っていらっしやるはず。

それなのに、待てど暮らせど馬車がやってくる気配はない。

ひなびた街にやってくる乗り合い馬車は今日の一本だけで村の住民にとってかけ

がえのない情報源だ。来れば村人たちが一斉に色めき立つ。

だがその反応は全くない。

しとしとと降り続く雨音を背にして食堂のカウンターに座り、それとなく店の主人に話を振ろうと思った瞬間だった。

「おい！ 乗り合い馬車が崖から落ちたそうぞ！ 誰か手を貸してくれ」

食堂の扉から放たれた言葉にいてもたってもいられず、その場を飛び出した。

村人たちの声を聞いている暇なんてない。

叔父上が。

僕が唯一家族と思える叔父上がこんなところで失われたら生きていけない。

ひりつくような焦りにせき立てられるまま、ぬかるんだ道をひた走った。

村からの街道は一本道で道中、林を抜けた海沿いに切り立った崖がある。すでに人が群がっていて、入り込むこともできない。

幻影魔術を使っている状態で不用意に多人数と接触すれば正体がバレやすい。

叔父上と会う前にバレるのは何としても避けたかった。

びしょ濡れになるのも構わず、村人たちより少し離れた場所から崖を見下ろした。黒い波が岩とぶつかりあって白い波しぶきをいくつも吹き上げる。

崖の中央、わずかにせり出した岩場に乗合馬車の残骸があった。

背筋につめたいものが走る。

叔父上は無事なんだろうか。あそこにまだいるのだろうか。

目がその場所から動くことを拒否する。

いやだ。何も見たくない。

もしも叔父上まで失われたら僕は……。

そう思うと怖くて怖くてたまらない。心臓がぎゅっと締めつけられて、胃の中にあつたものがひっくり返りそうだ。

こんなことならカナンの村でのんびり先回りなんかせず、叔父上についていけば良かった。

そうしたらきつと叔父上は独りで死なずに済んだ。

「おい、あそこ！ 人が見えたぞ！」

村人たちが一点を指さした。

黒い波涛の中にぶかぶかと浮かぶものが確かにあった。それはどンドン波に揺られて、崖から引き離されていく。

今このタイミングを逃せばきつともう遺体すら見つからない。

雨脚はどンドン強くなり、ぶきみな風のうなりが後ろから聞こえていた。

(だいたいようぶ。僕ならできる！)

意を決して胸いっばいに空気を吸い込み、海中へと飛び込んだ。



全身が水に叩きつけられて痛い。

だがこんな痛みよりも叔父上だ。犬よりもへたくそな水かきで何とか進む。海水と雨に阻まれ何度も瞬きして視界をクリアにしながら、叔父上を探す。

水底の石に魔術で光を灯すと、ようやく辺りが見通せるレベルになった。

海中の先にプカプカと浮かぶ体がある。

すらりと伸びた長い足にきゅっと引き締まった細い腰、跡目争い以後、公爵家から遠ざかるため近衛騎士として務めあげた体は相変わらず美しかった。

美しかった金色の髪が今は海水と汚泥にまみれている。

白い頬は冷たい水にさらされて青白くなっていた。形の良い唇からは熱が失われ、紫に近づいている。

(叔父上……！)

とっさに口を開いて叫ばなかった自分を褒めてやりたかった。

こんな状況で叫べば海水を飲み込んで、こちらまで漂流してしまう危険性がある。

海水をめいっばい手でかいて、叔父上の手を握りこむ。

想像以上に冷たい。

体はほとんど沖合に流されている。

崖の方を見ると、御者が岩棚の残骸のなかで生きていたらしく、村人たちが引き上げ作業を始めていた。

雷鳴が轟き、さらに天気が荒れ狂いはじめる。

どうする？ 村人たちの手を借りるには距離が遠すぎる。

かと言ってこのまま流されれば溺れ死ぬ。

やりようがないでもない。

叔父上は水神の加護を生まれた頃から得ている。それを分けてもらえば、この荒れ狂う海を静めることができる。

ただ問題は加護を分けてもらう方法だ。

魔術は口で唱えるため、唇に神秘が宿るといって考え方がある。

よって術者同士が口づけを交わすと様々な神秘を互いに分け合うことができる。

いう。

加護の分ちあいも同じだ。

(口づけなんて子どもの時のあれつきりだ)

意識をなくした叔父上の唇を奪うのはなんとも気が引ける。

だがこのまま遭難することになったら、僕も叔父上も死ぬ。それだけは避けたい。

(叔父上と心中するのも悪くないけど)

荒波に引きずり転がされながら、そっと叔父上の体を抱きしめた。

薄紫に染まった唇に舌を這わす。

波間に変化はない。

当然だ。

詠唱で重要なのは、唇に隠された舌なのだから。

舌を絡めなければ効果はない。

(ああー！ もう、どうにでもなれ！)

ぐっと舌を差し込むと叔父上の舌にぶつかった。

細くて小さい舌。

舌ざわりが柔らかくて、こんな状況じゃなかったら、存分に吸い上げてやりたかった。

ちゅ♡

キツく絡めて、水神の加護を分け与えてもらうよう心の中で唱える。

すると一瞬で波が弱まり、暗雲たちこめていた空に晴れ間がさしこむ。

荒々しかった波は凪いだように静まり、ふだんの穏やかさを取り戻した。

村人たちのいる崖から歓声が上がリ、無事に御者を助け出せたのが分かった。

この分ならもうあちらは心配ないだろう。

村人たちがいる方に向かつても良かったが、どこから正体が露見するかは分からない。
ない。

叔父上と自分の体二人分に幻惑の魔術をかけて、彼らに見破られないよう、そっ

と岸辺に向かった。

辺境の地　カナン　洞穴　午後三時過ぎ

ようやく岸边に上がった時はさしものヒューゴも体が凍えそうになっていた。

あのあと穏やかな陽気に戻ったとはいえ、夏はすっかり過ぎ去ったあとである。

海水にずっとつかつていれば、肌から熱は失われていくに決まっている。

このまま村に戻れば人目を惹くためここで一旦服を乾かす必要があった。

海水にぐっしょり濡れた叔父上の体を引き上げる。

水は飲んでいない。

規則正しく息をしていることにホッと、辺りを見回すと焚き火をくべられそう

ほらあな
な洞穴があった。

火の魔術を使えばすぐに服を乾かすこともできるのだがあいにくとヒューゴの苦手な術式だ。

指先ほどの小さな火種しか作れない。それでも焚き火の火種くらいにはなる。

洞穴の奥に転がっていた乾燥した木切れを集め、小さな櫓やぐらを組む。

火を起こすにも空気の通り道をちゃんと作ってやらねば焚き火はできない。

積み木遊びを思い出しながら組み上げた櫓にそっと火種を捧げた。

薄暗かった洞穴がパツと焚き火の光で華やいだ。

あぐらをかいた膝の上に叔父上の頭を乗せる。

「なんだか昔とあべこべだ」

昔は叔父上の膝に乗っかり、抱きついて遊んだものだ。

それが今では自分が叔父上にひざ枕をしている。

なんだか自分が一人前になれたようで心がむずがゆかった。

「早く起きて下さい」

そうしたら今まで伝えられなかった言葉をたくさん叔父上に捧げるのだ。
母との確執。

本当は公爵になどなりたくない、叔父上にその地位を返還したいこと。

なによりも公爵には僕なんかより叔父上の方が適任だということ。

そして――。

「あなたが好きだったこと……」

口に出すだけくすぐったくなる。

でも言葉にすると現実でも叔父上が自分の気持ちを受け止めてくれそうな気がした。

本当に実現できそうで、それが嬉しくてヒューゴは何度も何度も眠る叔父上の頭に、心に染みいらせるように囁いた。

「……………う」

何度目の告白を捧げた時か。

叔父上の瞳がゆっくりと開かれていく。

美しい宝石みたいなハシバミ色の双眸に息を飲む。

これほど近くで叔父上の瞳を見たのは、父が存命だった頃以来だ。試しに今まで一度も口にしたことのない呼び方で呼んだ。

「——カーティス」

叔父上の名前。

その音まで美しく、清らかに感じる。

「……………君は、ハーフリングか……………？」

おっと。

幻術をとくのを忘れていた。

今すぐ術を解いたら叔父上はどんな顔を浮かべるだろう。

おどろく？

それとも夢だと思う？

いたずら好きな気持ちで心をもたげる。

解除の詠唱を唱えようとした瞬間、叔父上は妙なことを口にした。

「ハーFRINGグ………確か人間の子どもと変わらない背格好の種族、でいいのか」
確認するような問いかけに違和感を覚える。

なぜ魔術にも精通している叔父上が、この大陸で暮らす種族の基本的なことを呟くのだろうか。

何かおかしい。

ささいな違和感にヒューゴは解除の詠唱を中止した。そして自分たちにとってあまりにもばかばかしい質問をした。

「あの、ここがどこか分かりますか？」

博識な叔父上なら洞穴から見える海の色でここがカナンだと分かるはずだ。

カナンの海は北の黒い海と比べて目も覚めるような美しいライトブルーだ。

その色あいは格段に明るく、王族のみが纏まとえる衣装の色に近いことから、辺り一帯は『王家の海』とも呼ばれている。

「……」

しかし叔父上の瞳は穏やかな海を見てもじつと黙りこくつたままだった。

困惑。

その一言で表情が埋め尽くされていた。

とろり、と暗い誘惑が僕の心を駆け巡った。

もしも、もしも叔父上が記憶をなくしているのなら、僕にとって天からの贈り物だった。

このまま公爵家のことも伏せて、跡目争いが起きたことも知らせずに僕が匿かくってしまえば叔父上を僕だけのものにできる。

(決めた！ 僕だけのものにする)

母のことも家のことももう関係ない。今の僕は叔父上にとって見知らぬ少年だ。

「僕のこと覚えてない？ カーティスの恋人だったんだ」

叔父上の名前を呼ぶと心臓がバクバクした。

今まで叔父上としか呼んだことがなかったから、呼び捨てなんて新鮮だ。

口のなかで何度も叔父上の名前を舌で転がす。

その音は口内で発するたび、甘い飴玉のようにとろけて、極上の味を与えてくれる。

「君が……私の恋人……？ いや待ってくれ。そうなると私は度しがたい男になるのではないか？」

ん？

「だってそうだろう。君みたいな、ハーフリングとは言え子どもを性的な対象として見ていたという事だ。これは人としてあるまじき行為であり、そんな君を恋人にしたあげく、それを忘れるなど——！」

んんん？

「ここは一つ私の頬を思いっきり殴ってくれないか」

あー。舐めてた。舐めてました。この人、筋金入りのまじめ人間だってこと忘れてました。

「えっと僕の今の姿はこっち」

ぱちん、と指を鳴らして幻術を解いた。

本来の姿ならここまで叔父上も思いつめたりしないだろう。

今年、十七歳。

どこからどう見ても成人を迎えた青年の姿だ。

これなら叔父上と恋人であつてもおかしくない。

叔父上は数秒僕をぼんやり見つめてから、自分の体を見返した。

御歳三十二歳。

均整の取れた体に引きしまった尻。年下の僕からしたら二十代でも通じそうな

若々しさだ。

が、しかし——。

「……………やはり私より年下ではないか！」

自分より幼い、しかも同性を恋人にした衝撃の事実がどうしても許せないらしい。どうやら記憶を失っても、今までつちかわれた考え方までは変わらないらしかった。

「なんてことだ。こんないたいけな子どもをたぶらかすなど、人倫にもとる行為ではないか！」

それからブツブツと叔父上は自分への呪詛じゆそを述べまくったが、叔父上の今言った内容にはひとつ間違がある。

そっと混乱し続けるカーティスの手を取り、乾いた砂の上に押し倒した。

「は？ え……………？」

「だいじょうぶ。落ちついて。僕がカーティスに思い出させてあげるから」
厳密にはこれから恋人になるのだが、そんな細かいことを気にする人間はここに
はいない。

ゆっくりと時間をかけてカーティスの濡れた体にまたがり、体重を下ろしていく。

「ちよつと、君、待ちなさい……っ」

「ヒューゴだよ。ヒューゴ」

ひとつ一つ音を区切って僕の名前を伝える。

案の定、叔父上の記憶喪失は根深いらしく、僕の名前を伝えた程度で記憶が戻る
気配はなかった。

（安心した。これでゆっくり、いくらでも時間をかけて籠絡させられる……）
思えばこの日のために娼館に通い、童貞を捨て、人と人がまぐわう時の知識を身
につけていたのかもしれない。

眉をひそめて、僕を心配そうに見上げる叔父上の顔は実に可愛らしい。

(きつと男との経験なんて、ないんだろうな)

そんな叔父上の初めてを奪うかと思うと、心臓がドキドキした。

「ッ……だめだ……こんなこと……」

顔を左右に振り回してキスを避ける姿にゾクゾクする。

あのかつての叔父上が脳裏を横切った。

いつも凜とした佇まいでルールに厳しく、人を褒めることはめつたにない自分にも他人にも厳しい人。

その細い眉はつねに眉間にシワが寄っていて、ゆるめられるのは病床の父上と話す時だけだった。

父上と話している時だけは、この人は柔らかな顔を見せていた。

その延長で僕にも甘い顔を見せていてくれたに過ぎない。

(ああ、くそ。なんでこういう時に思い出すかな)

いま叔父上の目の前にいる『男』は僕だ。

この美しいハシバミ色の瞳に映っているのは僕だけだ。
泣きたくなりそうな気持ちを押さえつけて、叔父上に二度目のキスをした。



叔父上の濡れたシャツを脱がせて、ズボンのベルトを引き抜いた時、叔父上の困惑といったら無かった。

今すぐやめなさいと言っては、手で僕の動きを阻もうとしてくる。

それをキスで黙らせては、叔父上の股間に膝をぐりぐりと押し当てた。

「っ♡ ……足をどかせなさい……っ！」

いつまで僕に対して命令口調でいられるのか、その時間を数えるだけでも楽しかった。

シャツのボタンを一つ外すたび、僕が驚くほど叔父上の体は震えて、砂浜に顔を

押しつけてその表情を僕から隠そうとする。

「だいじょうぶ。さっきまで嵐だったから、人が来ることはありませんよ」

「っ……！！ 屋外で事に及ぼうというのか、君は！」

「ヒューゴだってば」

叔父上の耳を咬み、前歯で耳たぶの柔らかさを堪能する。舌で最も柔らかい耳たぶをなめると――。

「ひ——い♡」

なんとも可愛らしい悲鳴が叔父上の喉から漏れた。

白い喉仏の感触を指で確かめると、くすぐったいのか猫みたいに甘えた声を上げて逃げようとする。

それでもはしばみ色の瞳はキツく僕を睨みすえたままで、ゾクゾクした。

（うん。叔父上のこういうところ、大好き）

せめて初めてなのだから優しくしようと思うのに、抑えきれない。

もつといじめて、喘がせて、今まで誰も見たことのない叔父上の蕩けた顔が見た
い。

引き抜いたベルトで叔父上の両手を頭上でしぼる。

「っ！ 本当に、やめないかっ！ ヒューゴ」

叱り飛ばす声があまりにも記憶を失う前の叔父上とそっくりで、どきりとした。
もしや記憶が戻ったのかと顔を上げたが、相変わらず叔父上の顔には僕が他人と
して映っていた。

記憶が戻ったらその表情にどれだけいろんな感情が乗るか、予想はつく。

(だいじょうぶ。まだ、戻っていない)

記憶をなくしている間に叔父上と既成事実を作ってしまったえば、こちらのものだ。

(絶対に僕のものにしてやる……！)

叔父上の体をあお向けに横たわらせて、両足を大きく開かせる。

チー……♡

ズボンのファスナーをゆっくりと下ろす。

「——このっ、今すぐ拘束をときなさい！」

「おことわり」

ズボンを引きずり下ろすと、叔父上の下着が見えた。

紺色の下着は股間の辺りだけじわりと濡れていた。テントを張ったみたいに盛り上がっている。

そこを指でつつくと、必死に目をつむろうとする。

(かゝわいい♡)

にやつく顔をおさえながら、ゆっくりと下着を引きずり下ろしていった。

「はい。ご開帳♡♡ 意外とカーティスのおちんちんって小さいんだね。ほら僕のと比べて見てよ」

どさりと叔父上のチンコの上に僕の肉棒を置いて、竿をくつつけあう。

ぬち、ぬちぬち♡♡

いやらしい水音が隣り合った肉棒から響き、叔父上の目にじわりと涙がたまりはじめる。

「ねえ、見ないと思いい出せないよ。カーテイス。ほら、見ろ」

敬語を捨てて命じると、涙に濡れたはしほみ色の瞳がおそろおそろこちらを見た。

「ひっ♡ あ……や……そんなモノ、くつつけるな！」

「どうして？ 恋人同士なんだから、こんなの当たり前でしょ？」

ぐ、ちゅううう♡

先走りて濡れた亀頭で叔父上の笠をつつくと、びくびくと震える。その反応が可愛くて、何度もつついてやった。

「や、ア、あ、ああ♡♡」

「カーテイスのおちんちん、小さいからすぐ、ぴゅっぴゅしちゃうかな。試してみようか」

「——何を、言って……あ、ひっ♡ ひ、んん♡♡」

「ほうら、カーティスは玉もまれるの好き？ 僕は好きだよ」
ぐにぐに、と先走りで濡れた指で揉むと、叔父上の肉茎が下腹部にくつつきそ
なほど勃起している。

「もつと気持ち良くしてあげるからね」

くつつけ合っていた竿を引き離すと、叔父上がほっと安堵した顔を浮かべる。

と同時にさっきから見え隠れしていたお尻の穴にそうっと人さし指をくつつけた。

「っ?!」

驚いて叔父上の尻がキュツと締まったけど、もう遅い。

強引に指を押し込んで、尻肉をかきわける。

「やああ♡ きもち、わるいっ」

「大丈夫。怖くないですよ。すぐ気持ちよくなれますから」

くるりと指を反転させると、キツキツの穴がわずかにゆるむ。

その隙を利用してさらに奥へと押し込んで、あるものを探す。

にぢゅ♡ ぢゅう♡

肉ひだをかき分けながら、指先で感触をさぐる。もつと柔らかくて、ぷっくりふくらんだソレを。

（——あった！）

丸みを帯びたソレを指先でちよんちよん、とこづく。面白いほど簡単に叔父上の体が跳ねた。

「や、あア!? なに、これっ」

「前立腺ですよ。男はここをいじられると女の子みたいに可愛い声をあげちゃう場所です。カーティスも可愛い声、出せるよね?」

答えを聞くのも待ちきれず、指の腹でふくらんだ前立腺を押し上げた。その効果はてきめんだった。

「ア、あ、ア♡ ヤダ……………なにか、くる……………! 指を抜けっ! 抜きなさ——

ッ♡♡」

トロトロに濡れた叔父上のおちんちんが早く出したいとばかりにヘソにくつつく位反り返っている。

射精間近のおちんちん。

「いきたくなってるんでしょ？ でも、だーめ。もつと気持ちよくしてあげるから」
もう一本指を入れて、ぐいっと強引に叔父上の尻穴を開かせた。

くぱあ、と音がするほど叔父上のアナルは濡れてて、僕はアナルを覗き込んだ。

「やアアア！ そんな、恥ずかしい場所、見るな、よせ、見るんじゃ、な、い♡♡」

「だいじょーぶ。恋人同士なんだから恥ずかしくないよ。ほら、存分にイッてみせて」

叔父上はキュッと唇を引き結んだかと思えば、覚悟を決めた顔で射精しようとする。
る。

恥も外聞も捨てて一生懸命に射精しようとするその顔に、僕も興奮を隠せない。

(でも本番はここからだ)

「ン、あ……、……ア……」

叔父上のおちんちんから先走りが溢れ出して、細い竿に幾筋も垂れ落ちる。

垂れ落ちた愛液はそのまま小さな睾丸を濡らし、尻穴近くを伝って、洞穴の乾いた地面に染みを作る。

ふちゅ♡ ちゅ♡ ちゅうう♡♡

どんどん量が増し、透明な先走りが白く濁り始め、最初の射精を迎えた瞬間、僕は思いつき尻穴を広げた。

「ッ! ちよつ、何を! え……あ、や、何コレ——ッ♡♡」

「こうすると気持ちいいのがずっと続くんだよ。ほらカーティスのお尻の穴、ぱくぱく喘いでる。すっごく可愛いね♡」

「へ……? あ、やめ——♡ やめなさい! 今すぐ指を外して……え♡」

懇願する叔父上を尻目に僕は叔父上の完全に蕩けはじめたアナルをじっくりと観察した。

高速でパクパクとひくつく入り口、その奥には濡れきった桃色の肉ひだが広がっている。

もう少し明るかったら前立腺も見えたんだろうか。

(いい事思いついた)

例え前立腺が見えなくても、僕が口にしてしまえばきつと経験の少ない叔父上はそれを真実と思い込むだろう。

だから――。

「カーティスの前立腺、ここから見えるよ。すごく気持ちよさそうにうねってる。僕の前でイくのがそんなに嬉しいんだ？　ぶっくりふくらんで、僕が入れるの待ちわびてるみたい」

「い、やアアア!!」

思った通り叔父上はその顔を羞恥に染め上げ、涙を流す。

それでもまだ僕の心は満足しない。

「僕の恋人になって。カーティス。そうしたらもつと気持ちよくしてあげる」

「ツ♡♡♡ こんなこと……して、何になる……♡♡♡ あ、ア……♡♡♡ ヒイ♡♡♡」

必死に我慢しているが、この気持ちよさに抗えていないのは、体を見れば分かる。

ぷちゆう♡♡♡

尻穴を広げられてイキっぱなしの叔父上のおちんちんは乳白色の涙を流して、懇願していた。

「やあ、ア、あ♡♡♡ もお、やだ……♡♡♡ 終わらせ、て……♡♡♡」

「何言ってるの？ 気持ちいいのはココからだよ」

くぱあ、と大きく広げた穴にあいた手の指を差し入れる。

「この状態でカーティスの前立腺いじったらどんな風に乱れてくれるのか、想像しただけで、僕もイキそうだよ」

「え——」

愕然とする叔父上を尻目に僕は指を差し込んだ。

ぶちゅ♡♡ にちにち♡♡

ぷっくりとふくらみ、蕩けきった前立腺を、男をメスに変えてしまう小さな豆つぶを人差し指で転がす。

何度も、何度もしっこく。

「ひっ！ やアアア♡♡ だめっ。そこ、さわるな！ さわるんじや——ないっ！」
さつきよりも激しく腰が揺れ、僕の指をさらに奥へと招き入れようとしてくる。
もう叔父上のおちんちんからはダラダラと精液が垂れ流されていた。

「カーティスのおちんちんはそうでも無さそうだよ？ 気持ちよさそうにピクピク震えてる。可愛いね♡」

「ツ♡♡ あ……………おとこ、に……………かわいい、などと……………っ♡」

「可愛いよ。前立腺さわられただけで、こんなになるだなんて、カーティスは女の子になれちゃうね？」

「わ、たしは……………男、だッ♡」